

1	言語
言葉の力をつけよう（音読3年⑤） 〔日記文学の代表作「更級日記」〕	
名	前

平安時代には、日々の記録が目的ではない、自己の内面を見つめる性質をもった文学性の高い日記文学が生まれました。その中の一つが菅原孝標の女（娘）が書いた「更級日記」です。

やってみよう

筆者の菅原孝標の女（娘）は平安時代の中流受領階級（地方官僚）を父親にもつ女性です。彼女は晩年に自分の人生を振り返ってこの日記を書きました。

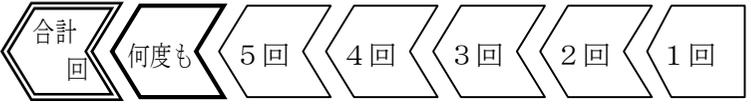
《解説》

東国地方の田舎で生まれ育った菅原孝標の女は、都で話題になっている「源氏物語」をはじめとする物語を、あるだけ読みたいと、薬師仏を作って一生懸命祈ります。やがて、国司の任を終えた父親に伴われ、京の都に戻るようになりました。

読めたら色をぬろう！



《読んだ回数》



あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひいでたる人、いかにばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじくこころもとなきままに、等身に薬師仏を作りて、手洗ひなどして、サツ入まにみそかに入りつつ、京にとくあげたまひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せたまへと、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。



★知っておきたい古典の知識

平安時代に成立した日記文学は、現代の随筆と同じような性質をもっています。その最初の作品が紀貫之の『土佐日記』です。『古今和歌集』の仮名序を書き、歌壇で華々しく活躍していた紀貫之が、老齢を迎えて土佐の守として赴任していたその地から、京へ帰るまでの旅の出来事や感想などを書き綴ったものです。旅に同行する女房になりきって書くことで、仮名文字を自由自在に使い、自己の内面を深く見つめた作品となりました。

『更級日記』は菅原孝標の女（娘）が自分の人生を振り返って書いた作品です。中流受領階級（地方官僚）の貴族の娘として生まれ、夢多き少女時代を過ごし、現実には失望し、幻滅しては仏の世界に救いを求めて老後を生きる自分の姿を描いています。

この二つの作品は、自分を深く見つめて思いを巡らす文学性の高い日記文学といえることができます。

読んでみよう

《口語訳》

あづまじの道の果てよりもなお奥の方に生まれ育った私は、どんなにかいなかじみていたであろうに、どうしてそんな風に思い始めたであろうか、この世の中に物語があるというのだが、それをなんとかして読みたいものだと思いいしては、これと云ってすることがない昼間や、夜遅くまで起きているときなどに、姉や継母「ままはは」などといった人たちが、その物語やあの物語、光源氏のありさまなどを所々語るのを聞くと、ますます読みたい気持ちがあつたののだけれども、私が満足するように、（物語を）何も見ないで覚えて語ることなどどうしてできようか（できはしない）。たいていそうじれたいので、我が身と同じ背丈に薬師仏「やくしほとけ」の像を作って、手洗いなどして、人の見ていないときにこっそり（仏間「ぶつま」）入っては、

「京に早く（私を）お上げになって、物語が多くあるそうでございますが、あるだけお見せになってください。」と、（仏様の前に）ひれ伏すようにして額「ひたい」を床にこすりつけて、お祈り申し上げるうちに、十三になる年、（京へ）のぼろうということになって、九月三日に門出「かどで」して、いまたちというところに移る。

《「更級日記」より・その後の話》

都に上った筆者が、「源氏物語」を全巻読みたいと願っていた時に、おばにあたる人（蜻蛉日記の筆者である藤原道綱母）が「源氏物語」の五十余巻のセットをケース入りでプレゼントしてくれます。孝標女（娘）は大喜びで、夢中で物語の世界に読み浸ります。が、後にそのときのことを回想し

平安貴族の生き様を知ることができます。当時の人々のものの感じ方・考え方に触れ、時代は異なっても人として変わらぬものがあることを感じるすることができます。

身に付けると…



て、すべきこともおろそかにしてあさはかだったと述べています。その場面の原文が次の文章です。挑戦して読んでみましょう。いとくちをしく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、「いとうつくしう、生いなりにけり。」などあはれがり、珍しがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしきものは、まさなかりなむ。ゆかしくたまふなるものを奉らむ。」とて、源氏の五十余巻櫃にいらながら、在中将・とほざり・せり河・しらら・あさうづなどいふ物語ども一袋取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。